

X アセスメントに利用される諸検査等

アセスメントとは、幼児児童生徒を理解するための情報収集と分析である。学習や行動の困難さの背景には、幼児児童生徒がもつ特性や現在もっている力の大きなアンバランスがみられることが少なくない。そのため、それぞれの力や特性をアセスメントすることが必要である。困難さの背景を探り、幼児児童生徒がもっている得意とする力を把握することで、効果的な支援の方法を考えることができる。解釈にあたっては、検査の特徴を十分に理解し、分析することが大切である。

また、保護者や必要な場合は子供自身に対して、実施の目的と結果の解釈の説明をすることが求められる。検査結果と合わせて普段からの行動観察も合わせて行うことで、より有効な支援につながる。

下表にある検査は、専門機関で実施した結果を保護者から示されるなど、担任・担当者として目にするものの多い検査をいくつか例示したものである。

※検査結果は子供の全てを判断するのではなく、あくまでも資料の1つである。

検 査 名	用 途 ・ 特 徴 等
S－M社会生活能力検査 第3版	2016年4月1日より第3版へ改訂された。適用年齢や検査方法は以前の版と変更がなく、社会生活に必要な能力を、身辺自立・移動・作業・コミュニケーション・集団参加・自己統制の6領域に分類し、質問紙検査として構成されている。知的能力とは独立した社会的適応能力を測定する。家庭・地域生活に関する質問も多いので、保護者と一緒に評価することが望ましい。就学事務手続資料として、知能検査結果と併せて示されることが多い。
適用年齢：乳幼児～中学生 所要時間：約20分	
遠城寺式乳幼児分析的発達検査法	移動運動、手の運動、基本的習慣、対人関係、発語、言語理解の機能ごとに検査表を使って評価する。観察とあわせて、保護者から子供の状態を聞き取りながら実施することができる。
適用年齢：0才0か月～4才8か月 所要時間：約15分	
新版K式発達検査2020	姿勢運動、認知・適応、言語・社会の3領域に分類され、年齢段階ごとに配列された検査項目に対する被検者の反応を観察し、評価する。結果は、領域別と全領域について発達年齢と発達指数で示される。
適用年齢：0才～成人 所要時間：約30分	2020版は、2001版の改訂版（再標準化）。
ポーターJ早期教育プログラム	乳幼児の発達、認知、身辺自立、運動、言語、社会性の観点から、どのような発達段階にあるのかを明らかにする。検査は、数か月毎に定期的に行い、その時点である動作目標ができたかどうかを検査用紙にチェックしていく。その記録によって、どの課題がいつ頃できるようになったかを判定する。保育園等で、障害のある幼児の指導の手がかりを得るために利用されている。
適用年齢：0才～6才	
日本版PEP－3 自閉症・発達障害児教育診断検査[三訂版]	自閉症のある幼児児童やその周辺の発達障害のある幼児児童の発達心理学的評価を目的とした検査である。認知／前言語、表出言語、理解言語、微細運動、粗大運動、視覚－運動の模倣という発達上の側面と、感情表出、対人的相互性、運動面、言語面から自閉症の特性を捉えることができる。「合格」「不合格」の判定のほか「芽生え」の反応を観察することができるので、幼児児童の発達に即した指導の手がかりを得ることができる。
適用年齢：2才～12才 所要時間：45分～90分	
TTAP（TEACCH移行アセスメント・プロフィール）	青年期や成人期の自閉症者が地域社会で生活するために必要とされる様々な知識やスキルについて、職業スキル、自立機能、余暇スキル、職業行動、機能的コミュニケーション、対人関係の6機能領域を、直接観察、学校・事務所観察、家庭観察の3場面で評定する。さらに、地域での実習について観察・評価を行っていくことで、移行プログラムの作成・支援につなげていくことができる。
適用対象：青年・成人期の高機能自閉症、知的障害がある自閉症者	
田中ビネー知能検査V	年齢段階ごとに、言語、動作、記憶、数量、知覚、推理、構成などの内容の項目が配置され、精神年齢（MA）、知能指数（IQ）として知的発達水準を測定する。診断的に用いるには、各問題の可否の傾向やWISC－IV等の結果とのつき合わせなど、総合的に分析し、解釈していくことが必要である。
適用年齢：2才～成人 所要時間：30～60分	
WISC－Ⅲ知能検査	WISC－Ⅲでは、言語性知能と動作性知能、また群指数として言語理解、知覚統合、注意記憶、処理速度の4つの尺度を測定することができる。評価点プロフィールで示すことで、「個人内差」という視点から知的発達をとらえ、指導の手がかりを得ることができる。
適用年齢：5才0か月～16才11か月 所要時間：60～70分	

WISC-Ⅳ知能検査	WISC-Ⅳでは、全体的な認知能力を表す全検査IQ（FSIQ）と、4つの指標（言語理解指標、知覚推理指標、ワーキングメモリー指標、処理速度指標）得点を算出する。全検査IQは、補助検査を除いた10検査の評価点合計から算出し、幼児児童生徒の知的発達の様相をより多面的に把握できる。 同じウェクスラー系の知能検査として、適用年齢3才10か月から7才1か月のWPPSI、同じく16才から89才のWAIS-Ⅳがある。
適用年齢：5才0か月～16才11か月 所要時間：60～70分	
WISC-Ⅴ知能検査	WISC-Ⅴでは、特定の認知領域の知的機能を表す5つの主要指標得点（VCI、VSI、FRI、WMI、PSI）と全般的な知能を表す合成得点（FSIQ）、子どもの認知能力やWISC-Ⅴの成績について付加的な情報を提供する5つの補助指標得点（QRI、AWMI、NVI、GAI、CPI）を算出する。
適用年齢：5才0か月～16才11か月 所要時間：60～70分	
K-ABC 心理・教育アセスメントバッテリー	K-ABCでは、物事を順位的・系列的な情報として処理する継次処理と全体を把握した上で部分を理解する同時処理の二つの認知処理尺度と、これまで獲得されてきた知識・技能を測定する習得度尺度から構成されている。尺度間の比較分析により、幼児児童生徒の得意な認知処理スタイルを活用した指導の検討に役立てることができる。ウェクスラー系の検査結果とあわせて分析し、指導に結びつけられることが多い。
適用年齢：2才6か月～12才11か月 所要時間：30～60分	
日本版KABC-Ⅱ 個別式心理・教育アセスメントバッテリー	日本版KABC-Ⅱでは、認知尺度のみならず、基礎学力を測定できる個別式習得尺度を備えている。認知処理を継次処理と同時処理だけでなく、学習能力、計画能力の4つの能力から測定する。また、行動観察チェックリストが下位検査ごとに設けられており、解釈にかかわる特徴的な態度についての観察結果を記録できる。認知尺度、習得尺度、双方を行って総合評価を行う他、いずれかの検査と他の心理検査とあわせて行うことも可能である。
適用年齢：2才6か月～18才11か月 所要時間：30～60分	
DN-CAS認知評価システム	DN-CASでは、同時処理・継次処理・プランニング・注意の4つの認知処理過程を測定し、その結果のプロフィールの特徴からLDやADHD、高機能自閉症等のある子供の認知的偏りを捉えること、その援助の手がかりを得ることができる。また、学習に遅れがある幼児児童生徒の知能水準の実態を把握することができる。
適用年齢：5歳～17歳11か月 所要時間：40分～60分	
PVT-R絵画語い発達検査	言語の理解力のうち、語彙の理解を基本的な指標として、その発達の状況を測定する。結果は、語彙年齢（VA）と評価点（SS）で示される。ことばでの反応を必要としないため、幼児や発達障害の児童生徒にも適用しやすい。
適用年齢：3才～12才3か月 所要時間：約15分	
DAM グッドイナフ人物画知能検査	子供は自己のもつ人物についてのボディイメージを描画として表すという仮説に基づき、子供の描いた人物画を、①人物像の部分、②人物像の部分の比率、③人物像や部分の明細化の程度に関する50の項目から採点し、精神年齢を算出する。検査の結果は、動作性の知的発達水準を評価していることが確認されている。言語反応を要しないため、言語発達の遅れがある場合にも広く適用できる。
適用年齢：3才～10才 所要時間：約5分	
MEPA-Rムーブメント教育・療育プログラムアセスメント	乳幼児のコミュニケーションや認知、問題解決の能力と情緒は、その身体、運動の能力を促進することにより、発達を促すことができるという考えに基づく検査である。運動・感覚、言語、社会性の3分野で構成され、7段階の発達水準が設定されている。本アセスメントに基づく指導プログラムが用意されている。
適用年齢：0才～6才 所要時間：約40分	
MEPA-ⅡR 重症児（者）・重度重複障がい児の ムーブメント教育・療法プログラ ムアセスメント	重症児（者）、重度重複障がい児の発達・療育・教育支援のためのアセスメントである。運動・感覚分野（姿勢・移動・操作：150項目）、コミュニケーション分野（言語・社会性・情緒：50項目）の評定項目がある。
適用年齢：0才～成人 所要時間：約40分	

DTVP フロスティグ視知覚発達検査	1 視覚と運動の協応、2 図形と素地、3 形の恒常性、4 空間における位置、5 空間関係の視点から、幼児児童の視知覚上の課題を把握する検査である。他の知能検査の動作性検査結果において、視知覚に課題のあることが推測される場合に、実施する場合がある。結果に基づき、視知覚技能の促進を図る指導書と練習帳が用意されている。
適用年齢：4才0か月～7才11か月 所要時間：30分～40分	
LDI-R LD判断のための調査票	学習障害のある児童生徒が示すことが多い特徴に関する質問項目をチェックすることを通して、学習障害の可能性の有無を評価する。主要な8つの基礎学力（聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する、英語、数学）と行動、社会性の領域から構成されている。 ＊英語、数学は、中学生のみ対象とした領域
適用年齢：小学校1年～中学校3年 所要時間：20分～40分	
津守式乳幼児精神発達診断法	発達検査は0歳から使用でき、知的能力だけではなく、身体運動能力や社会性の発達なども含めて、発達水準を測定する。発達年齢(DA)や発達指数(DQ)を算出するものもある。精神発達の過程を、「運動・探索・社会・生活習慣・言語」の5つの領域で診断する。検査には、検査者が直接乳幼児を検査したり、観察したりして評価を行うものと、保護者など養育者に質問して報告をもとにして評価を行うものがある。
適用年齢：0才～7才 所要時間：20分	
PRS LD児（学習障害）・ADHD児診断のためのスクリーニング・テスト	学級担任等対象の幼児児童生徒をよく知る人が、1 聴覚的理解と記憶、2 話し言葉、3 オリエンテーション、4 運動能力、5 社会的行動の5領域24項目をチェックし、LD・ADHDのスクリーニングを行う。言語性、非言語性の両点数が算出され、特性を理解しやすい。精密な診断のためには、WISC-IVやK-ABCの実施が必須。
適用年齢：幼児～中学校3年 所要時間：約3分	
URAWSS II 読み書きの速度の評価	2017年7月よりURAWSS改訂版として、読み書きに困難が疑われる小中学生を評価するツールである。学習に影響しやすい読み書き速度を評価する。評価のための時間は個別実施の場合は約20分×2回(2回目は必要に応じて実施)。アルテク(デジタルカメラやスマートフォンなどの身の回りにあるテクノロジー)を使った支援を示唆してくれる。読み課題は基本的に個別実施に変更された。読み困難を補う方法を検討するための介入課題が追加された(必要に応じて実施)。
適用年齢：小学校1年～中学校3年 所要時間：約40分	
STRAW-R 小学生から高校生までの改訂版標準読み書きスクリーニング検査	2017年10月より改訂版標準読み書きスクリーニング検査(STRAW-R)として、学習障害の中核障害である「発達性読み書き障害(発達性dyslexia)」を評価するために必要な学習到達度検査である。学習障害と同様、今まで客観的な評価標準がなかった小児失語症の読み書き評価においても有用とされる。
適用年齢：小学校1年～高校3年	
見る力を育てるビジョン・アセスメント WAVES	「見え」の困難が疑われる児童に、「見る力」のもとになっている視覚関連スキル(8領域)を、10種類の会検査でアセスメントし、視知覚上の発達課題を明らかにする検査。
適用年齢：小学校1年～6年	

千葉県総合教育センター作成のチェックリスト(H22)

LD児等の行動兆候チェックリスト(小・中学生用)	学級の児童生徒の行動を見直してみることで、特別な教育的ニーズの有無やその傾向を知ることができるように作成されたもの(障害を診断するものではない)。14領域ごとの5つのチェック項目について「まったくできない」1～「かなりよくできる」5の中から当てはまるものをクリックすると自動計算ファイルで、領域毎に合計点、平均点が算出され、レーダーチャートとして表される。
適用年齢：小学校1年～中学校3年	
行動の気になる生徒のチェックリスト(高校生用)	教師が特別な教育的ニーズの有無やその傾向を知ることができるように作成されたもの。気になる生徒に対して、学習面や行動面に困難があるか実態把握するためのツールとして活用するもの(障害を診断するものではない)。14領域の56項目に「全くできない」1～「いつもできる」4の中から当てはまるものをクリックすると自動計算ファイルで、領域毎に合計点、平均点が算出され、レーダーチャートとして表される。
適用年齢：高校1年～高校3年	

<引用・参考文献>

- 1) 心理テスト法入門第4版 日本文化科学社 平成14年
- 2) 日本文化科学社 ホームページ
- 3) 日本K-ABCアセスメント学会 ホームページ
- 4) 千葉県総合教育センター ホームページ